

オルネアイ ——文献史料と問題点の整理——

安永信二

はじめに

本誌第25号拙稿において、『イリアス』第二書571行（史料1）に記されたオルネアイ（もしくはオルネアイ）の位置を特定する研究意義を簡単に述べるとともに、2002年のヘスペリア誌に発表されたマーチャンドのドラティ遺跡がその候補に挙げられたことを紹介した。

同号が発行された2003年8月、筆者は鹿児島大学の小田洋教授とともにギリシアでマーチャンド女史にドラティを案内していただき、またその際オルネアイと思しきその他いくつかの場所を実際に検分する機会に恵まれていた。わずか一ヶ月前後の調査だったゆえに確たる結論を得ることはできなかったが、帰国した後にあらためて文献史料に当たり、オルネアイの位置に関する問題点を検討してみることにした。

本稿は、昨夏の現地調査によって得られた所感をもとに、オルネアイに関する文献史料のうち必要と思われるものをすべて挙げ、あらためて問題点を浮き彫りにしようと試みたものである。

なお本稿後半に引用している史料は、基本的にカリフォルニア大学アーヴァイン校が編纂したTLG（Thesaurus Linguae Graecae）からコピーし、重要な異読のあるところは必要に応じてOxford, Budé, Teubner版を採用した。また日本語訳にあたっては先達諸氏の邦語訳あるいはLoeb Classical Libraryの英語訳とBudé版のフランス語訳を参考にしたが、大部分は試訳であり、誤訳があるとすればすべて筆者の責任である。

I オルネアイの由来と史実

オルネアイの名前の由来を伝える史料は5点あるが、そのうち2点は他の文献を引用したものであるため、原史料と呼べるものは3点である。ストラボン（史料7-ii）は「同じ名の川」からであると説明し、パウサニアス（8-ii）は「エレクトエウスの子オルネウス」からつけられたと伝えている。パウサニアスとほぼ同じ時代のヘロデ

ィアヌス（9－ii）はこの二つを挙げ、さらに伝聞史料として「オルネアイのニュンフ」と「高みにあるため」という二つの縁起譚をつけ加えた。ヘロディアヌス（もしくは伝ヘロディアヌス）は、彼の著作の中でストラボンやパウサニアスを数多く引用しているものの、オルネアイに関しては典拠を示さぬまま説明し、彼の文言はそのまま後12世紀のエウスタティウス（史料13）に使われた。そのエウスタティウスは、オルネアイの項でヘロディアヌスの名を挙げずに、「地誌学者」（ストラボンのこと）と『エスニカ』（ステファノスの著作）のみを挙げてオルネアイの由来を紹介している。けれどもその文言は、ヘロディアヌスの文章そのものであった。

ヘロディアヌスを多用しているエウスタティウスがこの部分で彼の書を挙げてないのは、現在に伝わるヘロディアヌスの該当部分が、彼の真作ではない「伝ヘロディアヌス」である可能性を示している。これが事実であれば、原史料はストラボン、パウサニアスと、後6世紀のステファノスの3人となる。

この点に関してはさらなる文献学上の検討が必要であるが、オルネアイの由来については、「同じ名の川」と「オルネウス」の二つの伝承が古くからあり、「ニュンフ」と「高み」はパウサニアスよりも後の時代になって追加されたということが十分に考えられよう。

さて、本稿後半に挙げた史料から、史実と断定できるものはつぎの3点である。

- ① ペロポネソス戦争中の前410年代前半に、アルゴスの同盟軍としてスパルタ連合軍と戦い、占領・破壊された（史料3－i；3－ii）。
- ② 神聖戦争中、前360年代と前350年代に、ふたたびアルゴスの同盟国となり、スパルタ軍に占領された（史料4－i；4－ii）。
- ③ シキュオンと戦って勝利を収め、デルフィに青銅の戦勝記念碑を奉納した（史料5；6；8－iv）。

①と②により、前5世紀後半から前4世紀なかばにオルネアイが存在したことは事実であるが、いつごろからこのポリスが存在していたのかは不明である。ペルシア戦争の陸戦では、ペロポネソス諸ポリスの多くが参戦し、前480年のテルモピュレーにはミュケナイ軍80（Hdt. 7-22）、また翌年のプラタイアイの戦いにおいてアルゴリス地方からはミュケナイとティリンス（2つのポリスで計）400、エピダウロス800、トロイゼン1,000、レプレオン200、ヘルミオネ300、また近隣の地域からはコリントス5,000、シキュオン3,000、フレイウス1,000、アルカディアのオルコメノス600が馳せ参じたにもかかわらず（Hdt. 9-28）、オルネアイは一兵も出さなかった。

オルネアイがペルシア戦争に参戦しなかったのは、アルゴリス随一の強国アルゴス

が出兵できなかったことと関係しているのではないかと筆者は考えている。前5～前4世紀のオルネアイが、アルゴスとまったく同一の行動をとっているからである。アルゴスは、前495年にスパルタのクレオメネスとの戦いで成年男子のほとんどにあたる6,000の兵を失っていたため¹⁾、ペルシア戦争に派兵することができなかった。この後のアルゴスの事情を、ヘロドトスは戦死した市民の遺児たちが成人するまで奴隷たちが政権を担当したと、一方アリストテレスはペリオイコイをアルゴス市民として受け入れたとしている²⁾。

II ヘロドトスのオルネアイに関する記述

このペリオイコイの解釈については、史料2が手がかりとなるかも知れないのだが、この文章を訳出すること自体がきわめて難しい。ほとんどの写本には史料2-iの通りとなっているが、キュヌリア地方は一般的にアルゴスとスパルタの境界線地域を指し、ここはテュレア地方とも呼ばれていたので、Budé版のテキストではオルネエータイではなくテュレエータイと読み替えられている(史料2-ii)。しかしこの修正はおそらく誤っている。テュレアはアルゴスの領有するところであったが、前540年代なかばにこの地をめぐるスパルタと抗争が始まり、上述の通りクレオメネスによって同地は、ペロポネソス戦争中に一時的にアテナイが占領するまで、スパルタが支配していた(Thouk. 2-27, 4-56, 5-41)。したがってヘロドトスが生きていた時代はずっとスパルタの支配下にあり、彼がテュレアの住民をアルゴスのペリオイコイ(周辺に居住する従属民)だと考えたはずはない。

さて、キュヌリアという地は現在ではアルゴリス湾に近いアルカディア県の一部であるが、古代の地理ではアルゴス市南部のアルゴリス湾に近い地域、ラコニアとアルゴリスとのあいだにある、スパルタのペリオイコイが住む地域と考えられていた³⁾。しかしキュヌリア地方はここだけではなく、アルゴリス東部のアルカディア地方にも同じ名前の地域が存在していた(Paus. 8-27-4, Strb. 8-6-7 = C370)。アンドリューズが言うように、ヘロドトスはアルゴスの東から南の広い地域をキュヌリア地方と考え、ここではイナコス川流域のアルゴリス東部を指しているものと思われる⁴⁾。またキュヌリアという語はしばしば軽蔑的に使われる「犬(キュオーン)」から派生した地名で、キュヌリア人はペロポネソス半島東部にいた先住民の総称であったかも知れない。

史料2でもっとも重要なのが「ペリオイコイ」の解釈であろう。ペリオイコイはスパルタやクレタの場合には「周辺に居住する従属民」であるが、「従属」の意味をと

なわないケースも少なくない。事実、ヘロドトスはペリオイコイという単語を、動詞とその変化形を含めて22箇所で使用しているが、「周辺に住む従属民」の意味で使っているのはスパルタに関する2箇所の記述においてのみである。ラルセンもペリオイコイの意味を「従属民」とはせず、ゴドリーの英語訳（Loeb版）を支持して、当該部分を「キュヌリア人は、オルネアイと周辺地域の住民である」と訳した⁵⁾。

だが、この訳ではキュヌリア人がアルゴス東部に住む者のみに限定されるため、スパルタとの国境地帯のキュヌリア地方が除外され、「長期間アルゴスに支配されたためドーリス化されている」との文脈ともずれてしまう。また彼らがイオニア系の住民だと思われていた（あるいは彼ら自身が思っていた）ことは、パウサニアスの史料（8－ii）に「オルネアイは、（アテナイの王家の）オルネウスから名づけられた」との証言があることから明らかである。

以上の諸点を考慮に入れると、この一節は「オルネアイ人もまたペリオイコイである」というシンプルな訳であってもよいのではなかろうか。この訳にもとづいてヘロドトスの真意を推し測るとつぎのようになる。「アルゴス近辺に居住するイオニア系のキュヌリア人は、古い時期からアルゴスに支配されてきたためドーリス化していた。オルネアイ人も彼らと同じイオニア系住民で、アルゴスになかば従属した状態にあった。」このように解釈すれば、テキストを修正する必要もなく、上に挙げた史料すべての整合性がとれると同時に、前5世紀から前4世紀にかけて、オルネアイがアルゴスとまったく同じ行動をとった事情を理解することができるであろう。あるいは古くからアルゴスに従属してきたオルネアイが、アルゴスが窮地に陥った時期に遺児たちの養育をすることで復興に協力し、その後ポリスとして独立したことも考えられないわけではない。

だが解決できない問題がひとつ残る。史料8－iiiで、アルゴスがティリンス、ミュケナイ等、周辺の町を吸収合併したことが記されており、ここにオルネアイが含まれていることである。ミュケナイとティリンスの併合は前460年代であった。もしオルネアイがこれらと同じ時期にアルゴスの支配下に入ったとすれば、その後アルゴスの同盟ポリスとして参戦したとは考えにくいからである。

III オルネアイの位置

オルネアイがアルゴスの西に位置していたことを、多くの史料から予想することができるが、なかでも史料4－iiと8－iはさらに決定的な情報を提供してくれる。

パウサニアス（史料8－i）によると、アルゴスのデイラス門（アスピスとラリサ

の中間) からマンティネイアに向かう道が2本あり、1本はオイノエ村とアルテミシオン山に至る道、もう1本は同じくデイラス門から出てリュルケイアおよびオルネアイを通る道があった。そしてアルゴスからリュルケイアまでは60スタディオンの(1スタディオンを180mとして、10.8km)、リュルケイアからオルネアイまでも同じ距離だという。1本目は現在ではいくつかの候補があるものの、アルテミシオン山の裏をまわってネスタニを通る道、またもう1本は、イナコス川沿いに現在のステルナ、リルキア、カパレリを通過して、サンガに出るポルテス(「門」)を抜ける道と考えられる⁶⁾。

史料4-iiは逆方向からの情報である。前352/1年、第二次神聖戦争があつていたときにスパルタがメガロポリスに攻め込むという事件がおこった。この後スパルタ同盟軍はマンティネイア近くに、一方メガロポリスの同盟軍はアルフェイオス川の源流(現在のトリポリのやや南か)に野営し、スパルタ軍は敵軍が到着する前にオルネアイに攻め込んでここを占領した。この軍事行動は、ディオドロスの文脈からスパルタ軍が一日のうちにおこなつたものと読み取ることができる。攻撃・占領まで一気に起こすには、行軍の距離が長かつたはずはなく、マンティネイアからの距離は30km内外よりずっと遠くだったとは想像しがたい。また、このときの進軍ルートが、上記のサンガからカパレリを通るものであつたことはほぼ確実である。

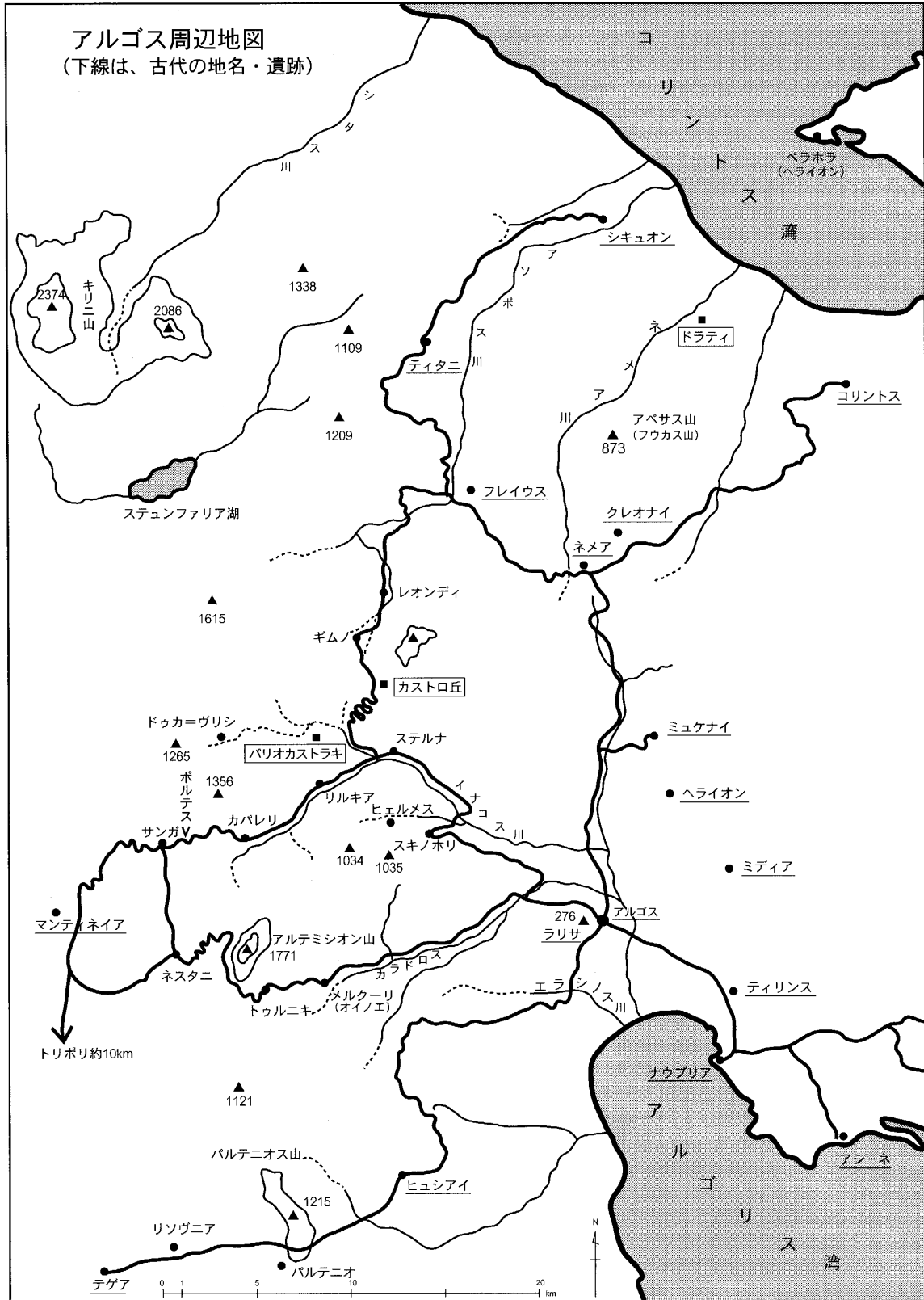
オルネアイは両史料の情報が重なるところ、すなわちアルゴスを中心とする20km内外の円と、マンティネイアから30km以内の円が交わり、かつアルゴスからマンティネイアに向かう街道沿いの地点にあるはずである。これはアルゴスからの計測方法によって若干の誤差が生じるものの、リルキア村(標高250m 1991年時点での人口613人)を中心とする地域に位置する。しかし、この村からは確実な遺跡は発見されておらず、街道から少し離れたところに候補地が2つ挙げられている。

一つはホープ=シンプソンとレイズンビが推すギムノ村の南3kmにあるカストロ丘。彼らは、ホメロスのオルネアイがレオンディ峡谷平野内にあると考えて調査し、カストロの丘から古典期もしくはヘレニズム期の見張り塔があること、丘の南と東斜面にミケーネ時代後期の土器片が見つかったことから、ギムノ村近辺をホメロスのオルネアイであると考えた⁷⁾。しかし少なくともこの地が古典期のオルネアイであつた可能性は低い。ギムノはステルナからフレイウスに向かう道沿いにあるのだが、ステルナからギムノとのあいだには、わずか2km余りで高低差200m以上を登る九十九折りの急峻な坂道があり、一方フレイウスからギムノまではほぼ平坦である(距離約12kmに対して標高差は約90m)。さらにステルナとギムノは10km前後離れており、パウサニアスが伝える距離とは違いすぎる。

また、アルゴスとフレイウスは前5世紀を通して敵対関係にあつた。このため、ア

ルゴスに向かって降りていく斜面の入り口に位置するカストロ丘が、アルゴスと同盟関係にあったオルネアイのポリスもしくは監視塔であったとはとても考えがたい。

第二の候補はプリチェットのオルネアイ。彼は19世紀終わりのメリアラケス、20世



紀初めのフリッケンハウスやミュラーらの報告をもとに、リルキアからドゥカ＝ヴリシに向かう道の途中の丘の東斜面にある東西約90m、南北約60mのパリオカストラキ（「小古城」）と呼ばれている城壁を調査し、ここから先史・ジオメトリック・古典期の土器片を発見した。リュルケイアと考えられてきたこの遺跡を、彼は古典期のオルネアイとし⁸⁾、古代のリュルケイアは現在のリルキア村ではなく、スキノホリ近くであろうと考えた⁹⁾。

この地がオルネアイであるという証拠もまだ見つかってはいないが、リルキア近辺、もしくはパリオカストラキに、古典期のオルネアイがあったことはほぼ間違いない。

だが、この点についても解決できない問題が生じる。最初に史実として挙げた③は、その他の傍証史料により、疑いのない歴史事実とみなすことができる。プルタルコス『デルフォイの神託について』（史料6）の中でデルフォイにある戦勝記念の奉納品を数え上げているが、これはおそらく彼がその場で奉納品を見ながら記述したものであった。彼がデルフォイの神官職にあったことを考えれば当然であろう。事実、彼が「ブラシダスとアカントス人、アテナイ人から」と読んだ部分は、実際に発見された碑文（ディッテンベルガーの『ギリシア碑文集成』＝史料5）とまったく同じ文言であった。それゆえオルネアイ人がシキュオン人との戦いに勝利してデルフォイに戦勝記念を奉納したことも史実と考えてさしつかえない。パウサニアスも第10巻でこのできごとを伝えており、この部分は、領域が隣接していたシキュオンがオルネアイに侵略を繰り返していたように読み取れる。けれども彼は年代を特定しておらず、またアルゴリスのオルネアイとシキュオンとのあいだにはフレイウスがあり、領土が接していたはずがなかった。では、この事実はいったいいかなる時代と状況の中で起こりえたというのであろうか。

IV もうひとつのオルネアイ

ストラボン『地理誌』は、アルゴリスのそれとは別のオルネアイがコリントスとシキュオンのあいだにあることを伝えている（史料7-i）。彼はオルネアイの近くには同じ名の川が流れていて、町にはプリアポスの神域があったと断言し（7-ii）、さらにマルマラ海に面した港市プリアポスとの関係があることを示唆する（7-iii）。マイネケは7-iの後半（「ホメロスはまだ、リュルケイオンもオルネアイも知らない…オルネアイと同じ名の村である」）すべてを後代の追加であると考えて削除した（Teubner版）。しかし、ストラボンはふたたび7-iiとiiiでコリントス近くのオルネアイについて述べており、マイネケの削除は意味がない。

この削除を無効とすれば、ストラボンは以下のように考えていたことになる。プリアポスを祀るオルネアイがコリントスとシキュオンのあいだにあり、その近くを同じ名前の川が流れていた。これはアルゴリスのオルネアイとは違う町であり、アルゴリスのオルネアイはホメロスの時代には存在しなかった。さらに彼の行間から、この町は、おそらくマルマラ海のプリアポスに同神を遷してからは衰退してしまったものと推測される。

パウサニアスの記述は、しかしこれと相いれない。彼はストラボンの名を挙げて彼の『地理誌』を引用することは一度もしていないが、少なくともこの部分については参考にしたことは明らかである。彼はオルネアイに関する伝承を、下表のとおり、まるでストラボンの記述とことごとく対比させるかのように数え上げた。

パウサニアスは、ホメロスはもちろんのこと、悲劇詩人やヘロドトス、またトゥキディデスなどを引用しているものの、個々の遺跡・由来・神話や伝承は、現地の案内人や住民の証言を主たる情報源としていた。そして彼は、ストラボンと同じ類の情報を得ようとしたが、結局コリントス近くのオルネアイについての詳細はわからなかったのかも知れない。そこで、彼はアルゴリスのオルネアイとコリントスのそれとの違いを強調することによって、婉曲にストラボンのオルネアイを否定し、アルゴリスのオルネアイを唯一のオルネアイとしようとしたのではなかろうか。

しかし、この解釈に無理があることにおそらくパウサニアス自身気がついていた。彼はオルネアイの位置関係を、「アルゴリスの地理のとおり」に「フレイウスとシキュオンの前」とした（史料8-i）その直後に、オルネアイの向こうに「シキュオンとフレイウス」があると順番をかえて繰り返し（史料8-ii）、第十巻ではわざわざ「アルゴリスの」オルネアイと記したのである（史料8-iv）。

【オルネアイに関するストラボンとパウサニアスの相違点】

	ストラボン	パウサニアス
名の由来	同じ名前の川	エレクトテウスの子オルネウス
場所1	コリントスとシキュオンの間	アルゴスから120スタディオン
場所2	シキュオンの上だがアルゴス人が所有	フレイウスの手前
神 域	プリアポス	アルテミス
ホメロス	アルゴリスのオルネアイを知らなかった	アルゴリスのオルネアイに言及している
人の居住	今はだれも住んでいない	ここには人が住んでいた

さてプリアポス神は、ディオニュソスとアフロディーテの子とも、ディオニュソスとニュンプの子ともされている巨根を持つ豊穡神で、ヘレニズム時代に入ってからとくに小アジアで信仰が高まった。だがマルマラ海に面したプリアポスという名の町はデロス同盟の貢納リストに見られ、すでに前5世紀なかばには存在していた¹⁰⁾。ストラボンがミレトス人、あるいはキュジコス人の建設（史料7－iii）としていることから、前7世紀にはプリアポスへの植民がおこなわれていた可能性もある¹¹⁾。しかし彼は、プリアポスの地名はオルネアイから同神が「遷された（*μεταφέρω*）」ためにつけられたかも知れないと述べ、「今はだれも住んでいない」との補足説明をつけてコリントス近くのオルネアイが放棄されたことを示唆している。

この、もう一つのオルネアイは「コリントスとシキュオンのあいだのオルネアイ川沿いにあり、シキュオンよりも高いところで、かつアルゴスが（一時的にせよ）領有していた地域」にあるはずだが、現時点では皆目見当もつかない。マーチャンドが発見したドラティは、ストラボンのオルネアイであるかも知れないという期待を抱かせることは事実である。しかし、2001年までに地表調査で得られた出土品はすべてミケーネ時代のものであった¹²⁾。これがストラボンのオルネアイであることを証明するためには、少なくともジオメトリック期あるいはアルカイック期のもの、さらにできればプリアポスの神域に関係あるものが出土しなければならない。

V 問題点の整理

従来は、ホメロスのオルネアイを古典期のオルネアイと同一視して、どこか一箇所にも唯一のオルネアイを求める努力がおこなわれていた。しかし文献史料を見るかぎりにおいては、ホメロスのオルネアイはさておき、アルゴリスのオルネアイとコリントス・シキュオン間のオルネアイの2箇所があるものと判断されよう。

アルゴリスのオルネアイ：以前はマイアーの意見に従って現ギムノ村近くが第一の候補とされていたが¹³⁾、むしろリルキア村近辺こそオルネアイであっただろうと想定することができた。そしてここには前5世紀から前4世紀にかけてオルネアイというポリスが存在し、アルゴスになかば従属するような形で同盟関係を結んでいた。ただし、パウサニアスが記すアルゴスによる周辺諸ポリスの併合（史料8－iii）にオルネアイが含まれていたことについては、さらなる検討が必要である。

もうひとつのオルネアイ：シキュオンと戦ったオルネアイは、おそらくアルゴリスのオルネアイとは違う、シキュオンと国境を接する別のオルネアイであった。奉納の年代がわからないのは残念であるが、プルタルコスが挙げた奉納品は、ロドピス以外

のものはすべて前5世紀から前4世紀に属し、またロドピスが献じた鉄串まで入れると前6世紀までのものを含んでいる(Hdt. 2. 135)。現存している宝庫や奉納品のほとんどがこの時代に属していることを考えれば、オルネアイによる奉納は前6世紀から前4世紀というレンジを外れることはないであろう。さてヘロドトスやツキュディデスはこのオルネアイに触れずに、ためらいもなくアルゴリスのオルネアイのみに言及している。彼らの時代にはすでにこのオルネアイは消滅していたとも考えられるが、これは単なる憶測にすぎない。

このように、いずれのオルネアイも考古学史料に乏しく、また文献史料上未解決の問題を抱えているが、2箇所オルネアイがあったことはほぼ間違いないものと筆者は考えている。同じ地名の町が近隣の地域に複数箇所存在することは、ピュロスでも見ることができた。ピュロスは、ミケーネ時代の王国の都であったためにその後の時代になっても名前だけが存在した、あるいはホメロスに登場する都の名であるがゆえに多数のピュロスが誕生したかのどちらかであると推察したが¹⁴⁾、オルネアイの場合もピュロスと同じようなケースではなかったかと思われる。

本稿は文献史料を挙げて問題点の整理に努めることを目的とするものであったが、筆者の分析と見解を必要以上に述べた嫌いがある。また註は最低限にとどめた。ご寛恕いただきたい。以下、オルネアイに関する史料を列举した。読者諸氏のご批判をお寄せいただければ幸いである。

註

- 1) How, W. W. and Wells, J. *A Commentary on Herodotus II* Oxford (1928) 96-97. Paus. III-4-1. Cf. Plut. Mor.245.
- 2) Hdt. 6-76~83; 7-148 「アルゴスの町では男子の市民をほとんど失ったので、奴隷たちが国事の全権を掌握し…この状態は戦死者の遺児たちが成人するまで続いた」(6-83 松平千秋訳); Aristot. Pol. 1303 a. 「アルゴスでも…ペリオイコイのある人数を、市民として受け入れざるを得なかったのである」(牛田徳子訳)
- 3) 古山正人「スパルタ東海岸のペリオイコイ地域の動向—ThyreatisとKynouriaを中心に—」『西洋古典学研究51』(2003) 58-59; Thouk. 2-27, 6-95, 4-56, 5-41; Paus. 8-1-1.
- 4) Andrewes, A. *A Historical Commentary on THUCYDIDES IV* Oxford (1978) 108-09.
- 5) Larsen, J. A. O. *R. E.* 19-1 (1937) s. v. Περίοικοι 822.
- 6) Howell, R. "A Survey of Eastern Arcadia in Prehistory" *B.S.A.* 65 (1970) 79-127. esp. 87.; Pritchett, W. K. *Studies in Ancient Greek Topography Part III (Road)* California Univ. (1980) 1-17, 32-47. なお、付図の道路のうち、アルゴスからマンティネイアに向かう道とヒュシアイからテゲアへの古代の道はプリチェットに従っている。

- 7) Hope Simpson, R. and Lazenby, J. F. *The Catalogue of the Ships in Homer's ILLIAD* Oxford (1970) 66-67.
- 8) Pritchett, *op.cit.* 19-32.
- 9) 現在のリルキア村は以前はカト＝ベレシという村であったが、1928年にリルキアと改称された。古代のリルケイアの位置は、アイギュプトスの息子たちの一人で、ダナオスの追求の手から逃れたリュンケウスに、ヒュペルメストラがラリサから狼煙を上げて合図したという古伝 (Paus. 2.25.4-5) により、「ラリサが見えるところ」を条件に求められている。19世紀以降多くの旅行家や研究者がスキノホリ対岸のイナコス左岸のスカラ近辺の地をリルケイアであるとしているが、プリチェットはスキノホリ村からさらに3 km西に行ったヒェルメスもその候補であることを示している。Müller, W. *R. E.* 13-2 (1927) s. v. Lyrkeia 2498-99, Pritchett, *op.cit.* 12-17. ; Παπαχατζής, Ν. Πανσανίου *Ελλάδος Περιήγησις* 2 Athens (1976) 186-88.
- 10) Tod, M. N. *Greek Historical Inscriptions from the Sixth Century B. C. to the Death of Alexander the Great in 323 B.C.* (1985rep.) Nr. 38 (449/8 B.C.), 56 (433/2 B.C.), 66 (425/4 B.C.); またこのほか、ツキュディデスやアッリアノスなどにもプリアポスの名が登場する。Thouk. 8. 107 ; Arrianus 1. 12.
- 11) Boardman, J. *The Greeks Overseas — Their Early Colonies and Trade—* London (1980 2nd ed.) 240.
- 12) Marchand, J. “A New Bronze Age Site in the Corinthia —The Orneai of Strabo and Homer?—” *Hesp.* 71 (2002) 119-148. マーチャンドの話では、2004年6月から本格的な発掘をおこないたいということであったが、2002年から2003年夏までの散発的な地表調査でも、ミケーネ時代以外の土器片は発見していないとのことであった。
- 13) Meyer, Er. *R. E.* 18-1 (1939) s.v. Orneai 1123-24.
- 14) 拙稿「ホメロスの船団目録とその時代—メッセニアとアルゴリスからの考察—」九州産業大学国際文化学部紀要25号 (2003) 1-22.

【オルネアイに関する文献史料】

史料1 ホメロス『イリアス』2巻569—77行

Οἱ δὲ Μυκίνας εἶχον ἐυκτίμενον πτολίεθρον
 ἀφνειὸν τε Κόρινθον ἐυκτιμένας τε Κλεωνάς, 570
 Ὀρνειάς τ' ἐνέμοντο Ἄραιθυρέην τ' ἐρατεινὴν
 καὶ Σικυῶν', ὃθ' ἄρ' Ἄδρηστος πρῶτ' ἐμβασίλευεν,
 οἱ θ' Ὑπερησίην τε καὶ αἰπεινὴν Γονόεσσαν
 Πελλήνην τ' εἶχον ἠδ' Αἴγιον ἀμφενέμοντο
 Αἰγιαλὸν τ' ἀνὰ πάντα καὶ ἀμφ' Ἐλίκην εὐρεΐαν, 575
 τῶν ἑκατὸν νηῶν ἦρχε κρείων Ἀγαμέμνων
 Ἀτρεΐδης·

みごとに築かれた町ミュケーナイ、
 豊かに富めるコリントス、巧みに築かれたクレオーナイを保つ者ども、
 オルネアイと、いとおしきアライテュレエー、
 アドレーストスが初代の王となったシキュオーンに住む者ども、
 またヒュペレイエーや陰しきゴノエッサ、
 ペルレーネーやアイギオンを領し、
 アイギアロス一帯、広やかなるヘリケーあたりに住まう者ども。
 百艘の船に乗るこの者たちを率いるのはアガ멤ヌーン、
 アトレウスの子なり。

史料2 - i ヘロドトス『歴史』8巻73節

Οἱ δὲ Κυνοῦριοι ἀντόχθονες ἐόντες δοκέουσι μόνοι εἶναι Ἴωνες,
 ἐκδεδαριῶνται δὲ ὑπὸ τε Ἀργείων ἀρχόμενοι καὶ τοῦ χρόνου
 <παριόντος>, ἐόντες Ὀρνεῖται καὶ οἱ περίοικοι.

(ペロポネソス半島に住む7つの種族のうち)、キュヌーリア人は土着の民で唯一イオニア系であるように思われるが、長期間アルゴスに支配されていたためドーリス化されている。オルネアイ人もまたペリオイコイである。

史料2 - ii 同上 (Búde版)

・ ・ ・ ἐόντες Θυρεῖται καὶ οἱ περίοικοι.

…テュレア人はペリオイコイである。

史料3 - i トウキュディデス『戦史』5巻67節

οἱ δ' ἐναντίοι αὐτοῖς δεξιὸν μὲν κέρας Μαντινῆς εἶχον, ὅτι ἐν τῇ ἐκείνων τὸ ἔργον ἐγίγνετο, παρὰ δ' αὐτοὺς οἱ ξύμμαχοι Ἀρκάδων ἦσαν, ἔπειτα Ἀργείων οἱ χίλιοι λογάδες, οἷς ἡ πόλις ἐκ πολλοῦ ἄσκησιν τῶν ἐς τὸν πόλεμον δημοσίᾳ παρείχε, καὶ ἐχόμενοι αὐτῶν οἱ ἄλλοι Ἀργεῖοι, καὶ μετ' αὐτοῦσὶ ξύμμαχοι αὐτῶν, Κλεωναῖοι καὶ Ὀρνεᾶται, ἔπειτα Ἀθηναῖοι ἔσχατοι τὸ εὐώνυμον κέρας ἔχοντες, καὶ ἰππῆς μετ' αὐτῶν οἱ οἰκεῖοι.

(スパルタ軍の布陣の) 反対側は、右翼にマンティネアの軍が陣取った。かかる戦役が彼らの領内でおこなわれたからである。彼らの隣にはアルカディアの同盟軍、そのつぎにアルゴスの精鋭部隊千人。彼らは、国家が長期間にわたって戦いのために訓練してきた者たちであった。これに彼ら以外のアルゴス軍と同盟国たるクレオナイとオルネアイの軍が続き、最左翼にはアテナイ軍とアテナイの騎兵が占めた。

史料3 - ii 同 6巻7節

καὶ ἐς Ὀρνεᾶς κατοικίσαντες τοὺς Ἀργείων φυγάδας καὶ τῆς ἄλλης στρατιᾶς παρακαταλιπόντες αὐτοῖς ὀλίγους, καὶ σπεισάμενοί τινα χρόνον ὥστε μὴ ἀδικεῖν Ὀρνεάτας καὶ Ἀργεῖους τὴν ἀλλήλων, ἀπεχώρησαν τῷ στρατῷ ἐπ' οἴκου. ἐλθόντων δὲ Ἀθηναίων οὐ πολλῶ ὕστερον ναυσιτριάκοντα καὶ ἑξακοσίους ὀπλίταις, οἱ Ἀργεῖοι μετὰ τῶν Ἀθηναίων πανστρατιᾷ ἐξεληθόντες τοὺς μὲν ἐν Ὀρνεαῖς μίαν ἡμέραν ἐπολιόρκουν ὑπὸ δὲ νύκτα ἀύλισαμένου τοῦ στρατεύματος ἄπωθεν ἐκδιδράσκουσιν οἱ ἐκ τῶν Ὀρνεῶν. καὶ τῇ ὑστεραίᾳ οἱ Ἀργεῖοι ὡς ἦσθοντο, κατασκάψαντες τὰς Ὀρνεᾶς ἀνεχώρησαν καὶ οἱ Ἀθηναῖοι ὕστερον ταῖς ναυσὶν ἐπ' οἴκου.

(スパルタ軍はオルネアイを占領した後) オルネアイにアルゴスからの亡命者を住まわせ、軍の一部を彼らのもとに残した。そしてオルネアイとアルゴスが相互に侵略しないように一定期間の平和条約

を結ばせ、軍を祖国に戻した。しかしまもなくアテナイ軍が軍船30隻と重装歩兵600をもってやって来ると、アルゴス人は全兵力をもってオルネアイに進撃し、丸一日これを包囲した。しかし夜になって軍勢が離れた場所に野営したため、住民はオルネアイから逃げてしまった。翌日アルゴス軍がこれに気づくと、オルネアイを破壊して撤兵し、やがてアテナイ軍も軍船とともに帰国した。

史料4-i デイオドロス『世界史 (Bibliotheke)』16巻34節 (1c.B.C.)

Ἔμα δὲ τούτοις πραττομένοις συνέστη πόλεμος Ἀργείοις πρὸς Λακεδαιμονίους, καὶ γενομένης μάχης περὶ πόλιν Ὀρνεὰς ἐνίκων οἱ Λακεδαιμόνιοι καὶ τὰς Ὀρνεὰς ἐκπολιορκήσαντες ἐπανήλθον εἰς τὴν Σπάρτην.

これらのこと—アルタバズスの反乱—があつているとき (前363/2年), アルゴス人とラケダイモーン人とのあいだに戦いが起こり, オルネアイのポリス近くで戦端が開かれた。ラケダイモーン人が勝利し, オルネアイを占領した後, スパルタに引き上げた。

史料4-ii 同 16巻39節

Ἔμα δὲ τούτοις πραττομένοις καὶ κατὰ τὴν Πελοπόννησον ἐγένοντο ταραχαὶ καὶ κινήσεις διὰ τοιαύτας τινὰς αἰτίας. Λακεδαιμόνιοι πρὸς Μεγαλοπολίτας διαφερόμενοι τὴν χώραν αὐτῶν κατέδραμον Ἀρχιδάμου τὴν ἡγεμονίαν ἔχοντος· οἱ δὲ Μεγαλοπολίται παροξυνθέντες ἐπὶ τοῖς πραχθεῖσι καὶ καθ' ἑαυτοὺς οὐκ ὄντες ἀξιόμαχοι παρὰ τῶν συμμάχων μετεπέμψαντο βοήθειαν. Ἀργεῖοι μὲν οὖν καὶ Σικυώνιοι καὶ Μεσσήνιοι πανδημεὶ κατὰ τάχος ἐβοήθησαν, Θηβαῖοι δ' ἀπέστειλαν πεζοὺς μὲν τετρακισχιλίους, ἵππεῖς δὲ πεντακοσίους, στρατηγὸν ἐπιστήσαντες Κηφισίωνα. Μεγαλοπολίται μὲν οὖν μετὰ τῶν συμμάχων ἐκστρατεύσαντες κατεστρατοπέδευσαν περὶ τὰς πηγὰς τοῦ Ἀλφειοῦ ποταμοῦ· οἱ δὲ Λακεδαιμόνιοι τρισχιλίους μὲν πεζοὺς παρὰ Φωκέων προσελάβοντο, ἵππεῖς δὲ ἑκατὸν καὶ πεντήκοντα παρὰ Λυκόφρονος καὶ Πειθολάου τῶν ἐκπεπτωκότων ἐκ τῆς ἐν Φεραῖς τυραννίδος· συστησάμενοι δὲ δύναμιν ἀξιόμαχον κατεστρατοπέδευσαν περὶ Μαντίνειαν. μετὰ δὲ ταῦτα ἐπὶ πόλιν Ὀρνεὰς τῆς Ἀργείας καταντήσαντες ἔφθασαν αὐτὴν ἐκπολιορκήσαντες πρὸ τῆς τῶν πολεμίων παρουσίας, οὐσαν σύμμαχον τῶν Μεγαλοπολιτῶν.

これらのこと—神聖戦争—が起こつているとき (前352/1年), つぎ

なることが原因となってペロポネソス中に混乱と変動が生じた。すなわちラケダイモン人がメガロポリスと不和となり、アルキダモス指揮のもと、メガロポリスの領内に攻め込んだのである。メガロポリスは彼らの行為に怒ったが、彼らのみでは太刀打ちできず、同盟諸ポリスに支援を求めた。アルゴス、シキュオン、メッセネは全軍をもってただちに救援に向かい、テバイは4000の歩兵と500の騎兵を送り、ケフィシオンがこの軍の指揮を執った。

メガロポリス軍は同盟軍とともに進軍し、アルフェイオス川の源近くに野営した。一方ラケダイモン軍は、フォキスの3000の歩兵と、フェライの元僭主たちリュコフロンとペイトラウスが送った150の騎兵をその軍勢に加え、十分な戦闘力を形成してからマンティネイア近くに陣を張った。そして彼らはアルゴリスのポリスオルネアイに向けて進攻し、敵軍が到着する前にこれを占領した。オルネアイはメガロポリスの同盟国だったからである。

史料5 『ギリシア碑文集成』 (Sylloge Inscriptionum Graecarum 3)

No.79 (4c.B.C.)

Βρασίδης καὶ Ἀκάνθιοι ἀπ' Ἀθηναίων

ブラシダスとアカントス人、アテナイ人から

史料6 プルタルコス『ピュティアの神託について』15節 (Moralia 401D)

(1-2c.A.D.)

**‘Βρασίδης καὶ Ἀκάνθιοι ἀπ' Ἀθηναίων’ καὶ ‘Ἀθηναῖοι ἀπὸ Κορινθίων’
καὶ ‘Φωκεῖς ἀπὸ Θεσσαλῶν’, ‘Ὀρνεᾶται δ' ἀπὸ Σικυωνίων’, ‘Ἀμφικτύονες
δ' ἀπὸ Φωκέων.’**

(娼婦ロドピスの奉納品や黄金でつくられたフリユネーの像と、各ポリスの戦勝記念奉納品を対比) ‘ブラシダスとアカントス人、アテナイ人から’, ‘フォキス人, テッサリア人から’, ‘オルネアイ人, シキュオン人から’, ‘隣保同盟, フォキス人から’

史料7-i ストラボン『地理誌』8巻6章17節(C376)(1c.B.C.-1c.A.D.)

εἰσὶ δὲ καὶ Ὑσίαι τόπος γνῶριμος τῆς Ἀργολικῆς καὶ Κεγχραί, αἱ
 κεῖνται ἐπὶ τῇ ὁδῷ τῇ ἐκ Τεγέας εἰς Ἄργος διὰ τοῦ Παρθενίου ὄρους
 καὶ τοῦ Κρεοπόλου. Ὅμηρος δ' αὐτὰς οὐκ οἶδεν, οὐδέ τὸ Λύρκειον,
 οὐδ' Ὀρνεάς· κῶμαι δ' εἰσὶ τῆς Ἀργείας, ἡ μὲν ὁμώνυμος τῷ ὄρει τῷ,
 αἱ δὲ ταῖς Ὀρνεαῖς ταῖς μεταξὺ Κορίνθου καὶ Σικυῶνος ἰδρυμέναις.

またアルゴリスの有名な場所ヒュシアイと、テゲアからパルテニオ
 ス山とクレオポロス山を通過してアルゴスへ行く道の途中にケンク
 レアイがある。ホメロスはこれらの町を知らなかった。ホメロスは
 また、リュルケイオンもオルネアイも知らない。これらはアルゴリ
 スの村で、前者は(その近くにある)山と同じ名であり、後者はコ
 リントスとシキュオンのあいだに位置するオルネアイと同じ名前の
 村である。

史料7-ii 同 8巻7章24節(C382)

Ὀρνεαὶ δ' εἰσὶν ἐπόνυμοι τῷ παραρρέοντι ποταμῷ, νῦν μὲν ἔρημοι
 πρότερον δ' οἰκούμεναι καλῶς, ἱερὸν ἔχουσαι Πριάπου τιμώμενον,
 ἀφ' ὧν καὶ ὁ τὰ Πριάπεια ποιήσας Εὐφορίων Ὀρνεάτην καλεῖ τὸν
 θεόν· κεῖνται δ' ὑπὲρ τοῦ πεδίου τοῦ Σικυωνίων, τὴν δὲ χώραν ἔσχον
 Ἀργεῖοι.

オルネアイは傍らを流れる川に因んで名づけられている。今はだれ
 も住んでいないが、以前は美しい街並みがあり、尊崇を集めたプリ
 アポスの神域もあった。このことから『プリアペイア』を書いたエ
 ウフォリオスは、この神を“オルネアイに坐ます”と呼んでいる。
 オルネアイはシキュオン平野の上にあるが、この地はアルゴス人が
 領有していた。

史料7 - iii 同 13巻1章12節 (C587)

Πριάπος δ' ἔστι πόλις ἐπὶ θαλάττῃ καὶ λιμῆν' κτίσμα δ' οἱ μὲν Μιλησίων φασίν, οἵπερ καὶ Ἄβυδον καὶ Προκόννησον συνώκισαν κατὰ τὸν αὐτὸν καιρὸν, οἱ δὲ Κυζικηνῶν ἐπώνυμος δ' ἔστι τοῦ Πριάπου τιμωμένου παρ' αὐτοῖς, εἴτ' ἐξ Ὀρνεῶν τῶν περὶ Κόρινθον μετενηνεγμένου τοῦ ἱεροῦ, εἴτε τῷ λέγεσθαι Διονύσου καὶ νύμφης τὸν θεὸν ὀρμησάντων ἐπὶ τὸ τιμᾶν αὐτὸν τῶν ἀνθρώπων,

プリアポスの町は海（マルマラ海）に面しており、港市でもある。ミレトス人が建設し、彼らは同じときにアビュドスとプロコンネソスに植民したと言う者もいるが、キュジコス人がつくったのだと言う者もある。町の名はその地の住民たちに信仰されていたプリアポスに因んでつけられたが、コリントス近くのオルネアイから遷されたか、あるいはその神（プリアポス）がディオニュソスとニュンフの子であると言われていることから、人々はプリアポスを祀るようになったのである。

史料8 - i パウサニ阿斯『ギリシア案内記』2巻25章5節 (2c. A. D.)

ἐς μὲν δὴ ταύτην ἐστὶν ἐξ Ἄργους ἐξήκοντα μάλιστα ποὺ στάδια, ἐκ δὲ Λυρκείας ἕτερα τοσαῦτα ἐς Ὀρνεάς. Λυρκείας μὲν δὴ πόλεως, ἅτε ἥρημωμένης ἤδη κατὰ τὴν Ἑλλήνων στρατείαν ἐπὶ Ἴλιον, οὐκ ἐποιήσατο Ὅμηρος ἐν καταλόγῳ μνήμην Ὀρνεάς δέ -- ἔτι γὰρ ὠκοῦντο -- , ὥσπερ τῷ τόπῳ τῆς Ἀργείας ἔκειντο, οὕτω καὶ ἐν τοῖς ἔπεσι προτέρας ἢ Φλιοῦντιά τε καὶ Σικυῶνα κατέλεξεν.

アルゴスからその地（リュルケイア）まで約60スタディオン（約11 km）、リュルケイアからオルネアイまでも同じくらいである。リュルケイアのポリスについて、ギリシア軍のイリオン遠征のころにはすでに無人になっていたので、ホメロスは軍船目録の中で触れていない。一方オルネアイについては—ここには人が住んでいた—アルゴリスの地理の通りに、その詩の中でフレイウスやシキュオンの前に挙げている。

史料 8 – ii 同 2 卷25章 6 節

ἐκαλοῦντο δὲ ἀπὸ Ὀρνέως τοῦ Ἐρεχθέως· τοῦ δὲ Ὀρνέως ἦν τούτου Πετεώς, τοῦ δὲ Μενεσθεύς, ὃς Ἀγαμέμνονι μετὰ Ἀθηναίων τὴν Πριάμου συγκαθεῖλεν ἀρχήν. ἀπὸ μὲν δὴ τούτου τὸ ὄνομα ἐγένετο τῇ πόλει, Ἀργεῖοι δὲ ὕστερον τούτων Ὀρνεάτας ἀνέστησαν ἀναστάντες δὲ σύνοικοι γεγόνασιν Ἀργεῖοις. ἔστι δὲ ἐν ταῖς Ὀρνεαῖς Ἀρτέμιδος τε ἱερὸν καὶ ξόανον ὀρθὸν καὶ ἕτερος ναὸς θεοῖς πᾶσιν ἐς κοινὸν ἀνεμμένος. τὰ δὲ ἐπέκεινα Ὀρνεῶν ἢ τε Σικυωνία καὶ ἢ Φλιασία ἐστίν.

(オルネアイの地名は) エレクテウスの子オルネウスから名づけられた。そして彼の子がペテオス、さらにその子がメネステウスで、このメネステウスはアテナイ人とともに、プリアモスの王国をとともに倒すべくアガ멤ノンに協力した。その彼（オルネウス）から、町の名がつけられたのである。アルゴス人は、後にオルネアイ人を立ち退かせた。そして立ち退いたオルネアイの人々はアルゴスのシュノイコイ（同居市民）となった。オルネアイにはアルテミスの神域と女神のクソアノン（木彫神像）、そして万神のための共通の神域がある。オルネアイの向こうに、シキュオンとフレイウスがある。

史料 8 – iii 同 8 卷27章 1 節

ἡ δὲ Μεγάλη πόλις νεωτάτη πόλεων ἐστίν οὐ τῶν Ἀρκαδικῶν μόνον ἀλλὰ καὶ τῶν ἐν Ἑλλησι, πλὴν ὅσων κατὰ συμφορὰν ἀρχῆς τῆς Ῥωμαίων μεταβεβήκασιν οἰκήτορες· συνήλθον δὲ ὑπὲρ ἰσχύος ἐς αὐτὴν οἱ Ἀρκάδες, ἅτε καὶ Ἀργεῖους ἐπιστάμενοι τὰ μὲν ἔτι παλαιότερα μόνον οὐ κατὰ μίαν ἡμέραν ἐκάστην κινδυνεύοντας ὑπὸ Λακεδαιμονίων παραστῆναι τῷ πολέμῳ, ἐπειδὴ δὲ ἀνθρώπων πλήθει τὸ Ἄργος ἐπηύξησαν καταλύσαντες Τίρυνθα καὶ Ὑσιᾶς τε καὶ Ὀρνεᾶς καὶ Μυκήνας καὶ Μίδειαν καὶ εἰ δὴ τι ἄλλο πόλισμα οὐκ ἀξιόλογον ἐν τῇ Ἀργολίδι ἦν, τὰ τε ἀπὸ Λακεδαιμονίων ἀδεέστερα τοῖς Ἀργεῖοις ὑπάρξαντα καὶ ἅμα ἐς τοὺς περιοίκους ἰσχὺν γενομένην αὐτοῖς.

メガロポリスは、アルカディアだけでなく、ギリシアでもっとも新しい町である。ただし、ローマ人の支配下に不運にも住民たちが移住したポリスは別であるが。アルカディア人たちは、アルゴリスの事情を知っていたので、力を得るためにメガロポリスに集まってき

た。以前、アルゴリスの人々は、戦いでラケダイモン人に屈する危険性が毎日のようにあったのだが、ティリンス、ヒュシアイ、オルネアイ、ミュケナイ、ミデア、その他アルゴリスの名もなき町を廃してアルゴスの町の人口を増やしてからは、ラケダイモンの脅威は減少し、同時に周辺の民族（ペリオイコイ）に対するアルゴスの影響力が増していったのである。

史料8 - iv 同 10巻18章5節

Ὅρνεᾷται δὲ οἱ ἐν τῇ Ἀργολίδι πολέμῳ σφῶς Σικυωνίων πιεζόντων τῷ Ἀπόλλωνι εὐξάντο, εἰ ἀπώσαιντο ἐκ τῆς πατρίδος τῶν Σικυωνίων τὸν στρατόν, πομπὴν τε ἐν Δελφοῖς αὐτῷ στελεῖν ὅσημέραι καὶ ἱερεῖα θύσειν οἷα δὴ καὶ ὅσα ἀριθμὸν. νικῶσί τε δὴ μάχῃ τοὺς Σικυωνίους, καὶ ὥς σφισιν ἐφ' ἡμέρας πάσης ἀποδιδούσι τὰ κατὰ τὴν εὐχὴν δαπάνη τε ἦν μεγάλη καὶ μείζων ἔτι τοῦ ἀναλώματος ἢ ταλαιπωρία, οὕτω δὲ σόφισμα εὐρίσκουσιν ἀναθεῖναι τῷ θεῷ θυσίαν τε καὶ πομπὴν χαλκῶ ποιήματα.

アルゴリスのオルネアイ人は戦いでシキュオンが彼らを圧迫していたとき、アポロン神に、もし自分たちの領土からシキュオンの兵たちを追い払うことができたなら、毎日ポンペ（祭礼行列）をデルフォイに送り、ありとあらゆる犠牲獣を捧げると約束した。その後オルネアイ人はシキュオン人を戦いで破った。しかし、祈願した通りのことを毎日おこなっていると、出費も労力もしだいに大きくなっていったので、神に青銅でつくった供物とポンペを奉納するという知恵を働かせた。

史料9 アエリウス＝ヘロディアヌス（および伝ヘロディアヌス）(2c. A.D.)

i 『正しいつづり字について』 s.v. Orneiai or Orneai

Ὅρνεαίᾳ ἢ Ὅρνεαί, κώμη Ἀργείας.

アルゴリス地方の村

ii 『韻律について』 3-1. p.285

<’Ορνεαί>

κώμη Ἀργείας, ἢ καὶ Ὀρνεαί -- ἔστι δὲ καὶ ἑτέρα πόλις μεταξὺ Κορίνθου καὶ Σικυῶνος· καλεῖται δὲ οὕτως ἢ ἀπὸ Ὀρνέως τοῦ Ἐρεχθέως ἢ ἀπὸ Ὀρνέας νύμφης ἢ ὅτι ἐφ’ ὕψους κεῖται ἢ ὁμωνύμως Ὀρνέα τῷ ποταμῷ -- ὀξύνεται ὡς πληθυντικά.

アルゴリスの村オルネアイもしくはオルネイアイは、一別のポリスがコリントスとシキュオンのあいだにある。エレクテウスの子オルネウスから、オルネアイのニュンフ、高みに位置している、あるいは同じ名を持つ川に因んで名づけられたということだが、一複数形で示される。

史料10 ビザンティウムのステファノス『地誌—抄訳—』 p.496

s.v. Orneai or Onneiai (6c.A.D.)

[<’Ορνεαί> ἢ <’Ορνεαί,> κώμη Ἀργείας. ἔστι καὶ ἑτέρα πόλις μεταξὺ Κορίνθου καὶ Σικυῶνος. καλεῖται δὲ οὕτως ἢ ἀπὸ Ὀρνέως, υἱοῦ Ἐρεχθέως, ἢ ἀπὸ Ὀρνέας νύμφης, ἢ ὅτι ἐφ’ ὕψους κεῖται, ἢ ὁμωνύμως Ὀρνέα τῷ ποταμῷ. τὸ ἐθνικὸν Ὀρνεάτης.]

オルネイアイもしくはオルネアイ。アルゴリスの村。別のポリスがコリントスとシキュオンのあいだにある。エレクテウスの子オルネウスから、オルネアイのニュンフ、高みに位置している、あるいは同じ名を持つ川に因んでそう呼ばれている。民族はオルネアイ人である。

史料11 アレクサンドリアのヘシュキオス『辞典』 s.v. Orneai (5/6c.A.D.)

’Ορνεαί : πόλις.

オルネアイ : ポリス

史料12 『スーダ辞典』 s.v. Orneias (10c.A.D.)

’Ορνεαί · πόλις.

オルネイアス : ポリス

史料13 テッサロニキのエウスタティウス『ホメロス註釈 イリアス571行について』
(12c.A.D.)

Ὀρνειαὶ δὲ ἢ δίχα τοῦ <ι> Ὀρνεαί -- τοῦτο γὰρ μάλιστα ἐν κοινῇ
χρήσει κεῖται -- κώμη ἐστὶν Ἀργείας κατὰ τὸν Γεωγράφον. ἐστὶ δὲ
καὶ ἑτέρα μεταξὺ Κορίνθου καὶ Σικυῶνος. ταύτην δὲ ὁ τὰ ἔθνη
γράφας πόλιν λέγει, οὐ κώμην. πληθυντικῶς δὲ καὶ αὐταὶ λέγονται,
ὡς καὶ αἱ Κλεωναί. γράφονται δὲ διὰ διφθόγγου αἱ Ὀρνειαί, ὡς καὶ
Βρυσειαὶ καὶ Αὐγειαί. καλεῖται δὲ οὕτως ἢ ἀπὸ Ὀρνέως, υἱοῦ Ἐρεχθέως,
ἢ ἀπὸ Ὀρνέας νύμφης, ἢ ὅτι ἐφ' ὕψους κεῖνται, ἢ ὁμωνύμως Ὀρνέα
τῷ ποταμῷ. τοῦτο δὲ καὶ ὁ Γεωγράφος φησὶ λέγων, ὅτι Ὀρνεαὶ ἐπάνουμοι
τῷ παραρρέοντι ποταμῷ. ὅς καὶ ταῦτά φησιν, ὡς νῦν μὲν ἔρημοι, πρότερον
δ' οἰκούμενοι καλῶς. ἐτιμάτο δ' ἐκεῖ Πρίαπος, ὃθεν καὶ Ὀρνεάτης ἐκαλεῖτο.
κεῖνται δ' ὑπὲρ τοῦ πεδίου τοῦ τῶν Σικυωνίων.

オルネイアイあるいはイオータ(i)のないオルネアイは—後者のほう
が一般に使われている—、地理学者（ストラボンのこと）によれば
アルゴリスの村である。しかし別のオルネアイもあり，こちらはコ
リントスとシキュオンのあいだにある。これを『エスニカ（上記史
料10）』は村ではなくポリスだったと記している。オルネイアイはク
レオナイのように複数形であらわし，ブリュセイアイやアウゲイア
イのように2つの二重母音で書く。その名はエレクテウスの子オル
ネウスから，オルネアイのニュンフ，高みに位置している，あるい
は同じ名のオルネアイ川に因んでいる。このことについて地理学者
（ストラボン）は，オルネアイは傍らを流れている川から名づけら
れ，以前は美しい街並みがあったが今やだれも住んでいない，そこ
ではプリアポスが崇拜され，それゆえ（プリアポスは）‘オルネアイ
に坐ます’と呼ばれており，シキュオン平野よりも上に位置している
と伝えている。

史料14 『ホメロス古註』（『イリアス570行』）

Ὀρνειαίς. Κώμην Ἀργείας.

オルネアイス : アルゴリスの村

史料15 『アリストファネス古註』（『鳥』399行）

**Ὀρνεαῖς· Παρὰ τὰ ὄρνεα ἔπαιξεν. ἔστι δὲ τῆς Ἀργείας πόλις, ἧς Ὅμηρος
[Il. B 571] μνημονεύει λέγων < Ὀρνειάς τ' ἐνέμοντο.> ἴσως δὲ, ὅτι ἐν Ὀρνεαῖς
μάχη ἐγένετο Λακεδαιμονίων καὶ Ἀργείων.**

鳥 (ornea) にひっかけて駄洒落を言っている。(オルネアイは) アルゴリスのポリスで、ホメロス（『イリアス』2巻571行）は《Orneias t' enemonto》と語ってこれに触れ、同様にオルネアイでラケダイモン人とアルゴス人との戦いがあったことによる。